

昔々、大きな森の近くに、一つの小さな村がありました。

その村の人々は森を恐れ、決してそこに近づこうとはしませんでした。

昼間でも薄暗くて不気味なその森には、怪物が棲んでいるという言い伝えがあったのです。

子供たちが森に入ろうとすると、大人たちはよく、「森の怪物に食われちまうぞ」と言いました。

ところが最近では、村のほとんどの人はそのような話を信じないようになっていました。

子供が森に入ると危ないから、森に近づかせないようにするために、そのような作り話をしているのだろう。村人の多くがそのように思っていました。

しかし子供たちに至っては、「怪物がどんなやつか確かめに行こうぜ」と言い出す者までいたのです。

そんなある日、村の子供が何人か、遊びに行ったまま夕方になっても帰ってきませんでした。

心配した親が他の子供たちに聞くと、その子たちは森の怪物の正体を探ろうとしていたというのです。

いなくなった子供は、全員がちょうど好奇心旺盛な年頃の男の子でした。

村の人々は、すぐに子供たちを探しに行くことにしました。夜になれば、森はますます危険になるでしょう。一刻も早く子供たちを見つけなければなりません。

老人たちは、「怪物が出るぞ」と言いましたが、この事態にその言葉に耳を傾ける者はいません。

村の若者五人が、森に入って子供たちを探すことになりました。

彼らはいなくなった子供の両親たちに声をかけると、森の中へと入っていきました。

しばらくして、辺りがずいぶん暗くなってきました。しかし、若者たちも子供たちも戻ってきません。

両親たちは自分たちも森へ入ろうとしましたが、夜の森は大人でも危険だからと周りの村人に止められてしまい、ただうろたえるばかりでした。

次の日になっても、いなくなった人々は帰ってきませんでした。

「怪物に食われたんじゃ」と村の老人は言います。

朝のうちに、さらに村の若者が十人、森へ探しに行くことになりました。

普段から薄暗いとはいえ、昨日よりは森も明るく、いくらか安

全であると思われず。

村人たちは、今度こそ帰ってこない人々が見つかることを願いながら、若者たちを森まで見送ります。

それから数時間が過ぎました。しかし、森からは誰も出てくる気配がありません。

「なぜ誰も帰ってこないんだ？」

「一体森で何があつたんだ？」

「まさか、本当に怪物が出たんじゃ……」

「馬鹿言え、そんなの作り話に決まってるだろ」

ただならぬ事態に、村人たちは口々に騒ぎ始めます。何も状況が分からないまま、ただただ時間だけが過ぎていきました。

そんな中、残った村の男たちが総出で森を大搜索すると言い出しました。

小さな村で、子供だけでなくあれだけの若者までいなくなつては生活も成り立ちません。村人みなで協力して、一刻も早く彼らを連れて帰る必要があるでしょう。

しかし、これ以上行方不明の村人を増やす訳にはいきません。もしまた探しに行ったまま帰ってこなかったら——村人たちは顔を見合わせます。

そして結局、男たちを森へと送り出すことになりました。危険を感じたら、すぐ村に戻るようにと約束して。

それからしばらくして、森から若者が二人、ひどく焦った様子で息を切らして出てきました。どうやら森から戻ってきたのは

この二人だけのようです。

「一体何があつたんだい!!」

村に残っていた女たちは、すぐさま彼らに詰め寄りました。

「みんなで森の中を歩いてたらよお……綺麗な姉ちゃんたちが出てきて」

「それでみんなその姉ちゃんたちに着いてって、どんどん森の奥の方に行つちまつたんだ」

「俺たち何だか怖くなつて、慌てて逃げ帰ってきたんだ」

二人は何とか事の顛末を話し終えると、

「でも姉ちゃんたち、綺麗だったなあ……」

と、ぼんやりし始めてしまいました。

その話を聞くと、夫や恋人が森から帰ってこない女たちは怒り出しました。

「美女だか何だか知らないけど、一体どこで何やってるのよ」

「せっかく心配してやってたのに。まったく、とんだ怪物もいたもんだわ」

女たちはみるみるうちに不機嫌そうな様子になっていきます。

「一体どんな女だったのよ!」

と若者二人に訊ねてみても、二人はまだぼんやりしたまま、

「別嬪だったなあ」

「ああ」

と恍惚とした表情で答えるだけでした。

怒りが収まらない女たちは、とうとう自分たちで、男たちを森

から連れ戻しに行くことにしました。

次の日になると、いつの間にか森から帰ってきたあの若者二人が姿を消していました。近所の人も、誰も彼らの行方が分かりません。

「私、あの二人が森に向かっていくところを見たわ」

村の外れに住む少女が言いました。

「遠くてよく見えなかったけど、何だか様子が変わった」

女たちは、そういえば彼らが昨日から、心ここにあらずといった様子であったことを思い出しました。それも、恐るべき森の怪物たちの力なのでしょうか。

いよいよ、村の女たちは森へと乗り込んでいきます。女たちはみな険しい表情で、中には武器代わりの農具を手を持つ者までいます。

家族や恋人を取り戻すため、決意を固めた女たちは、薄暗い森の中をどんどん進んでいきます。

しばらく歩き続けると、視界がよりいっそう暗くなってきました。どうやら、ずいぶんと奥の方まで来たようです。

すると、今までしんと静まりかえっていた森の中に、何かの気配がかすかに感じ取れるようになりました。

女たちは立ち止まり、身構えます。

「お前たち、一体何者だ？」

「誰の許しを得て私たちの森へ入ってきたのかしら？」

突然、あちこちから声が聞こえてきました。気がつくといつの

間にか、若い女性たちに周りを囲まれていました。彼女らはみんな人間離れたとても美しい姿をしています。おそらくこれが、若者たちの言っていたものなのでしょう。

「あ、あんたたちこそ、一体誰の許しを得てうちの旦那を……」

鍬を持っていた女がそう言いかけると、美女の一人が音もなく背後に移動しました。どういう訳か、女はさっきまで美女がいた方向に鍬を構えたまま、動くことができません。他の女たちも同様に、動きを封じられていました。

「お前たち、あの村の人間か」

「男たちを連れ帰りに来たって訳ね」

美女たちが口々に言います。

「やっぱりあんたたちの仕業なのね！ 早く村の男たちを返してちょうだい！」

「うちの子は無事なんでしょうね!？」

村の女たちは、唯一動かせる口で次々と喚き散らします。

「女に用はない。帰れ」

「彼らは返さないわよ」

しかし美女たちは、その声にまったく耳を傾けようとはしません。村の女たちは身動きが取れないまま、睨み合いが続きます。

「妙な術なんて使ってんじゃないわよ、この怪物」

村の女の吐き捨てるようなその言葉に、美女たちは眉を不快そうにぴくりとうごかしました。

「怪物？ 心外だな。我らは森の精霊」

「ほんと、失礼しちゃうわね」

不機嫌そうに美女——森の精霊たちは横目で村の女たちを睨みつけます。

森の精霊。それは怪物の話よりも古い伝承で、数百年に一度男たちを惑わし精気を吸うことで子供を作るのだといいます。森の怪物の話は、そこから生まれたというのでしょうか。

「いいから早く男たちを返しなさいよ」

単なる作り話だと思っていた存在の出現に混乱しながらも、震える声で女が言います。

「……………いいだろう。連れ帰れるものならやってみろ」

しばしの沈黙のあと、森の精霊がそう言うと、村の女たちの身体に自由が戻りました。

それから女たちは、精霊たちに促されて森を進んでいきます。

そこで彼女らが見たものは、行方が分からなくなっていた村の男たちの姿でした。

「あなた、こんなところにいたのね!？」

「ほら、早く帰るよ」

女たちは口々に呼びかけますが、すっかり森の精霊たちの虜になつたらしい男たちは、虚ろな目をしたまま何の反応も示しません。

「もう、何してるのよ!」

若い娘は恋人の腕を引っ張りますが、びくともしません。村の女たちは途方に暮れました。

「どうしたの？ 連れ帰るんじゃないのかしら？」

嘲笑うように森の精霊が言いました。

「子供は？ 子供たちはどこにいるのよ!？」

森に入った子供の母親が叫びます。

「それならあっちにいるわよ」

精霊がうんざりしたように指差した先を見ると、いなくなっていた子供たちが美しい少女たちと楽しそうに遊んでいました。おそらく少女たちもまた、森の精霊なのでしょう。男たちとは違い、子供たちは元気そうにはしゃいでいます。

子供の無事をひとまず確認し、母親たちはほっと胸を撫で下ろしました。

一方で、他の女たちは必死に男たちに向かって呼びかけ続けています。しかし、どれだけ声をかけても、押ししても引いても、男たちは少しもその場を動こうとはしません。ただ、精霊たちに囲まれ恍惚とした表情を浮かべるだけでした。

「諦めて早く帰るんだな」

「そうよ、これ以上人間たちの相手なんてしてられないわ」

森の精霊は冷たく言い放ちます。

女たちも、男たちを村に連れ帰るのは不可能だと悟り始めていました。しかし、このまま帰る訳にはいきません。

「せめて……せめて子供たちだけでも返してちょうだい!」

女たちは声を振り絞るように言います。

それに対して、精霊たちは互いに顔を見合わせ、それから、

「……いいだろう、子供は返してやる。その代わりに、大人しく村に帰って今後二度と森に近づくな」と言いました。

こうして女たちは、何とか子供たちだけは取り返すことができましたが、村は多くの働き手を失うことになりました。

老人たちは、

「やはり村には恐ろしい怪物がいたのだ」と口々に言いました。

村の女たちは、いなくなった男たちや村のこれからのことを考え、ただただ悲嘆に暮れるばかりでした。そして、それからみな疲れきって、ぐったりと眠り込んでしまいました。

その夜、夫を取り戻すことができなかった村の女の一人が、ふらふらと村の外れ、森の方向へと歩いていきました。その手には、火のついた木の棒が握られています。

女は暗闇の中、森の入り口に辿り着くと、そこで火を放ちました。

辺りが炎で照らされ、女の顔が浮かび上がります。その表情は、笑っているようでした。

そして、女は軽やかな足取りで家に戻っていきます。あとには、勢いよく燃え盛る森だけが残されました。

炎は一晚で、森のおよそ三分の二を焼きました。

村の女たちはそのことを知ると、みなおかしそうに笑い出しました。誰が火を放ったか、そんなことはどうでもいいことでした。

た。

それから、二度と村人が森に近づくことはありませんでした。

「——という訳で、森を荒らす恐ろしい怪物たちは、最後に森を焼いてしまいました。おしまい」

木々の傍で、女が子供たちにお話をしていました。

「うわあ、怖いよお」

「怪物ってひどーい」

子供たちは怯えたり、腹を立てたりと、それぞれの反応を示します。

その様子に、女は優しく微笑みかけ、

「そうね、だから森の外には出ちゃいけないのよ。恐ろしい怪物がいるからね」

そう言って子供たちの頭を撫でました。

(完)